国立国語研究所学術情報リポジトリ

［講演］ 私のとらえたい東京語

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002722

【講演】私のとらえたい東京語[1]

飛田　良文
（国立国語研究所名誉所員）

ご紹介いただきました飛田でございます。本来ならば，竹田さんが発表したことを私が発表するつもりで調査を始めましたが，若い人に手伝ってもらおうということで竹田さんに声をかけました。この調査を行おうとしたきっかけは，たまたま実践女子短大の非常勤講師を頼まれて社会言語学の授業を引き受けたときに東京のことばを取り上げようと思ったからでした。

東京のことばの調査というと，まず大島一郎さんの『東京都言語地図』が挙げられます。これは一定の面積で一か所を調べるという国立国語研究所の日本言語地図の方式をとっていました。しかし私は，ことばというものはそうではないだろうと考えたわけであります。人のいるところはたくさん調べる必要があり，また人が移動する方向を示すのは鉄道網であると考えました。

１．問題の所在—「東京語」の定義の曖昧さ

以前，國學院大学から出された『東京語のゆくえ』（國學院大學編 1996，東京堂出版）の書評を『週刊読書人』に書くためにじっくりとこれを読みました。そのときに驚いたのは，「東京語」の定義が書き手によってばらばらだという点です。したがって，章ごとに頭を切り換えなければならず，内容がつながらないということをその書評に書いたわけです。

つまり，「東京語」・「東京方言」・「東京弁」・「標準語」・「共通語」が全て同じように使われている現実があります。そこでまず東京に住む人々のことばと，そのことばを自身がどのように意識しているかということの調査を，今の社会言語学として第一にやるべきだと思いました。

そこでまず，東京駅から高尾駅までの調査を企画立案しました。学生たちが調査したい項目を加えていきましたので，調査項目は年々増えていきました。それで語彙のところがどういうわけか増えてしまったわけです。

私自身は，東京語の研究を始めてから、かれこれ 50 年になります。処女論文が「東京語の連母音『ア・ウ』の成立」（ 1962，『国語学研究』1）でした。東京語の時代区分を成立期，定着期，展開期と考え，そのうち成立期は『東京語成立史の研究』（1993，東京堂出版）でまとめました。定着期は，国立国語研究所の『国定読本用語総覧』（全 12 巻，1985-1997，三省堂）がその成果であり，戦後の展開期がこの実践女子短大の学生たちとの調査の成果ということになります。

---

[1] 本稿は，共同研究発表会（2011 年 10 月 30 日(日)，於：國學院大學渋谷キャンパス）における講演の録音をもとに原稿化したものである。原稿化は椎名渉子（フェリス女学院大学非常勤講師）が担当した。

２．「東京語」に対する意識，東京人としての意識

まずは，なぜ私が私なりの「東京語」の定義をするかということの論拠を示したいので、資料を紹介するかたちで進めてまいります。

> 今日，東京に住んでいる人は，自分の使うことばは東京語であり，標準語であると思っている人が多い。私自身も東京人であり，東京語の使用者であると考えている。ただ，私は千葉県に生まれ小学校入学のときから東京都武蔵野市に住み今日に至った。（飛田 1993,5p）

私は太平洋戦争中には小学生で長野に疎開しましたが，長野のことばを学ぼうとは全く考えませんでした。子ども心にも，「自分のことばが正しい」という自信を持っておりました。

> 20 歳以上の都民のうち，地方出身者は 55%，東京出身者は 45%である。さらに東京出身者の構成は，東京人二世が 26%，三世が７%，四世およびそれ以上が 11%である。また，地方出身者が東京へ出てきたときの年齢は，10 代が 44%，20 代が 40%で，両世代で 84%を占め，その大半が就職・結婚・就学のためであるという。（奥田道大 1963「東京人意識」『人間の科学』9,飛田 1993,6p より）

こういうわけで，移住者を東京人と考えるか考えないかによって，あるいは東京出身であっても，一世代，二世代，三世代，四世代以上という見方があるため，いったいどこを東京人と考えるのかということを私は知りたく思ったわけでございます。

そこで調査では，土着の純然たる東京弁――立川だったら立川弁，日野だったら日野弁，八王子だったら八王子弁の，三世代そこに住んでいる家族を調査対象として選びました。そして，東京人という意識について，次のようにまとめました。

> また，太平洋戦争後は住宅事情から，逆に東京生まれの人が近辺の神奈川県や千葉県など周辺に移り住む人が増加している。これらの人々は，ＪＲや私鉄の沿線に住み，都心に通い，意識として東京人である。これは私が子どものころ長野に疎開して感じたのと同じように，東京および東京語に対する無意識の優位性・文化性を感じているからであろう。（飛田 1993,6p）

では，そういった優位性というものを，江戸が東京になったときの東京人は持っていたのかどうかということを知るために探し出したのが，次の用例であります。江戸木挽町生まれの東京人である大槻文彦は『日本文典編輯総論』（1877 年『朝野新聞』）でこのように記しています。

> 今此ノ会話体ヲ取リテ文章ニ交ヘンニモ東京語ヲ取ランカ京都語ヲ取ランカ其ノ適従スル所ロヲ知ラズ然レドモ我国首都ノ地後来複タ此ノ東京ヲ転ゼザルノ見込アラバ終ニ此東京語（士大夫以上ニ通ズル者ヲイフ卑話ハ固ヨリ取ラズ）ヲ基本トセザルコト能ハズ（大槻文彦「日本文典編輯総論」1877/1/16『朝野新聞』，飛田 1993,6p より）

こういうわけで士階級のことば，あるいは大夫というのをどのように捉えるかという点にはいろいろな意味がありますが，一応国語辞典には「官位が五位以上の者」とありますから，「文字の読める人たち，身分の高い人たち」と考えていいわけであります。また，階級・職業・年齢・男女差などによって相違がありました。岡野久胤は明治 35 年（1902）「標準語に就きて」（『言語学雑誌』）において，長袖社会と熊八社会と官吏社会と商人社会のことばを比較すると，「正に一方言と他方言の差位は確に認むること」ができると述べています。

私にもそれを下さい	通用語
あたいにも，それ，をくんな	男児
私にもそれを，頂戴な	女児
私にも，それ，頂戴よ	芸妓社会
僕にも，それ，呉れ給へ	書生社会
わしにも，それ，くんねい	職人社会

（岡野久胤「標準語に就きて」1902/8/10『言語学雑誌』第 3 巻第 2 号，飛田 1993, 7p より）

岡野久胤は，もし標準語を選ぶとしたら上記のことばのうち，「通用語（中流社会の男子のことば）」であると述べています。私も，岡野久胤の述べた通り，現在の東京や教科書のことばは，中流社会の東京の男性ことばによって統一されたと考えています。それを証明しようとしたのが，私の『東京語成立史の研究』ということになるのでございます。

統一という点では，明治 37 年（1904）から使用された国定教科書が大きな変化をもたらしました。教科書が明治 37 年から一種類だけになるのですから，皆統一されていく傾向があるのは当然であろうと思うのでございます。

それが，私が国立国語研究所の国語辞典編集室で編集いたしました『国定読本用語総覧』ということになります。あの用例集を，どうぞこれからご利用いただきたいと思っております。同じ時代の新聞や雑誌，小説と比較すると必ず違いが出るはずです。いまは「電報を打つ」と使うと思いますが，第 1 期の国定教科書に「電報を掛ける」とあります。そして，「空中飛行機」などというものがありまして，それがやがて「航空機」になり，「飛行機」へと変わるわけです。そういうものが両方とも採用されていて一方に統一されていくといったことばの変化がありました。

３．文学作品においても重要視された「東京語」

地方出身の四国松山から上京した正岡子規が明治 33 年（1900）の『ホトトギス』において，文学のことばについて述べております。

> 東京の文学界は，長く東京人の占むるところとなったので，文学は東京に限り，文学者は江戸児に限り，文学上の材料は場所も人間も風俗も言葉も，東京でなければならぬといふ事になってしまふた。

そこで一人の女を書いても髷の形から衣服のこしらえ，下駄の鼻緒の色に至る迄其時の流行を追ふて五分も透かないやうに書く。それが書けなければ文学者でも小説家でも無いときまつた。そこへヒヨコと田舎の少年が出て来て，どうか文学者になりたいといふて見た処で，よしんば其少年に小説の天才といふやうな者があったにした処が，『ダゝ—』や『ガマー』では小説にならぬ。

（正岡子規「はじめに」，1900/10/30『ホトトギス』第4巻第1号，飛田1993，7pより）

正岡子規のいう松山の「ダゝ—」や「ガマー」は，翻訳して標準語にすると何というのでしょうか。私はまだ調べていないのですが，もしご存じだったら教えてください。というわけで，「ダゝ—」「ガマー」と書いたのではいけないということです。

要するに，東京のことばが文学作品，文化の中心だということを，地方出身者の正岡子規が認めたということは，大きな優位性を「東京語」が持っていたということになるというわけです。同じことを，東京生まれの尾崎紅葉も述べています。

それに会話という奴。是がまた中々むづかしい。矢張文章同様冗長にならないやうにとは，言ふまでもなく務める所だが，男の詞，女の詞，老幼の言葉。円朝の話を聴くやうにそれぞれに使ひ分けて行って，読んでいる内に，その会話で人々の性格を現すといふ，むづかしいには違ひない。所が有難い事は，日本の標準語とするものは，この東京の言葉なんだ。同時に吾々此東京で生れ，東京で人となったものだから，無意識の中に，この標準語を解し，身自らその標準語を話して居るのだから，是を文章にして会話に用ひるといふのには，比較的雑作もない。それがもし標準語が大阪か，仙台でゝもあった日には事だね。（山岸荷葉「故紅葉大人談片」，1904/2/1『新小説』第9巻第2号，飛田1993，8pより）

４．外国人も必要性を主張した「東京語」

一方，外国人は「東京語」をどう見ていたのでしょうか。それについては，バジル・ホール・チャンブレンの『A Hand Book of Colloquial Japanese』（第４版，明治40年）を私が訳した訳文で示します。

日本語には，また，たくさんの方言がある。しかしながら東京語（以前，口語における標準語であった京都語を少し修正したもの）が日本中の正式の交際の場において，圧倒的重要性をもっている。実用を好む学習者は東京語だけを熱心に勉強なさることをおすすめする。もし東京語が話せるようになれば，標準英語が概して英国で理解されるように理解してもらえる。日本全国の農民層を除いて，いや地方によっては農民にさえ理解してもらえるであろう。（飛田1993，8p）

要するに，農民のことばが方言であり，それ以外は方言ではないということになります。極端な言い方をすると、階級語、クラスダイアレクト、つまり「位相語」であるといえばいいということになってくるわけです。

５．「東京語」の区域と東京人意識

では，東京という地域は明治・大正・昭和と同じであったかというと，その範囲は次から次へと広くなってまいります。

> 東京が誕生したのは『江戸』が『東京』と改称されたときである。そのとき，江戸すなわち町奉行所支配地域（朱引内）は東京府となり，荏原郡・豊島郡・足立郡・葛飾郡の代官支配地域（農村地域）は，武蔵國知県事の管轄となった。その後何回かの改革が行われ，明治 11 年，旧町奉行所支配地が 15 区となり，旧代官支配地が郡部となる。明治 22 年には 15 区が東京市となった。昭和 7 年には，隣接町村を合併して市域が拡大され，東京市は 35 区となり，昭和 18 年には東京府と東京市が合併して東京都となったが，江戸文化を受けついだのは都市部であった。そして標準語の基盤とされた東京語も，都市部のことばであった。（飛田 1993, 9p より）

そうすると，都市部は次々と行政区画によって広がっていきます。松村明さんは，東京都の 23 区が「東京語」の区域だと言っておられます。

しかし，それでいいのでしょうか。私は，杉並区の隣の武蔵野市におりますから，松村さんによれば私は東京人ではなくなってしまいます。しかし三世代の調査をやってみると，同じ一家族の中であっても，親子孫という三世代だとその意識は違うことが分かります。子どもは東京人だと思っているのに，親は「立川人だ」，「浅川人だ」と言っている事実に気がつきました。

つまり，年齢や世代によって東京人意識は変わっているのだと知ったわけです。そうすると，今度は東京の地域をどんどん広げていくことが可能だと私は思ったわけです。そして最近は「首都圏」ということを考えるようになりました。

鉄道線路に従って人が移動することを考えると，鉄道網の広がりが重要になります。私が子どものころは中央線の車庫は新宿から中野までででしたが，その後，三鷹に車庫ができました。その次に豊田というように，次々と車庫が高尾のほうへ伸びていきます。それに伴って東京人意識が変わったのであろうと考え，その関係を探したいというのが，私の東京人意識に関する最大の問題意識であります。つまり，「車庫と意識との関係」ということになりましょう。不思議なことではありますが，やはり人間が移動し，そこに人が住むのだから，そういう問題であると考えます。

そう考えると今度は，それより以前の人の動いたのは昭和 20 年の太平洋戦争の終わったときだというのは当然のことです。そしてその前は，当然関東大震災，その前は明治維新ということになります。

６．「標準語」・「東京語（＝共通語）」・「東京方言」の捉え方

しかし私は，近代語史研究という立場に立つと，そうとはいかないと内心考えているわけです。それは，教科書のうち国定教科書が行われた明治 37 年から昭和 24 年までの 45 年間は，日本全

国どこでも１つの教科書で教育が行われ，ことばの規範ができました。要するに，文部省で編集し，官製による教科書調査会が審査をし可決したのであります。ですから，審査・可決されたということは，これは国家の決めた規範性があるということになりますので，その時期の教科書のことばを私は「標準語」と呼ぶことにしているわけでございます。

そして昭和24年に，今度は検定教科書に変わります。そうすると，教科書の会社の数だけ「共通語」ができたというように考えられます。いいかえると，「東京語」を「共通語」とする標準ができるわけです。これを標準と呼ぶべきか，何と呼ぶべきか，そのことばはまた考えなければなりません。

そういうわけで，「日本の領土はどこだ」となったときに，教科書によって書かれることは違うわけです。尖閣諸島はどうなっているとか，北海道の先がどうなっているという問題があります。ある教科書では「日本の固有の領土だ」と書いてあるが，ある教科書にはそうは書いてない。そういうことになってくると，やはり大事なところで統一がとれません。よって，この時代は一応文部省が検定をしているので，「共通語」と呼ぶ基準をここに置きたいと思っているわけでございます。

そうなると，今度は「東京方言」のほうはどう考えるかということになりますが，これについては次のように考えました。

> **親子孫と三世代以上東京で生活し成長した土着の人々のことばを『東京方言』と呼び，『東京語』と区別しておきたい。（飛田 1993, 10p より）**

７．「東京弁」と「東京語」の違い

それでは「東京弁」をどう考えたらいいのでしょうか。私は，「東京弁」と「東京語」は同じでいいと考えていたのですが，秋永一枝さんはかなりはっきりと「東京弁」を区別しておられます。あの『東京弁辞典』は，私は名著だと思っております。

というのは，以前，勝海舟の父である夢酔の『夢酔独言』（勝左衛門太郎（夢酔）1802『夢酔独言』）を授業で読みました。しかし，『江戸語辞典』のどれを引いても意味がわかりません。ところが，この『東京弁辞典』を引くと言葉が全て出てきます。要するに，『夢酔独言』のことばは武士のことばではないということです。庶民の日常語が書かれているのです。あるいは武士のことばも入っているでしょうが，「日常生活語」であります。そういうものは，洒落本，滑稽本といった小説の類には出てきていないということになります。

さてそこで「東京弁」について，『東京弁辞典』から紹介します。

> **東京の地域についての意識は人によって異なるものである。“東京”が東京都をさすとすれば，面積は 2,186 平方キロ余，東西は最長約 90 キロだが，島嶼部を除けば南北は，20 キロ前後の細長い地域（a）である。／一方，その東端に位置している，特別区である 23 区は約 597 平方キロ（ｂ）で，それを東京とよぶ場合が多い。（秋永 2004, 658p より）**

この（b）が松村明さんの言われてきた部分でありますが，私はこれを少し修正しようという野心を持っております。それは以下の内容から指摘できます。

> 更に，江戸墨引内（町奉行支配地）にほぼ相当する東京旧市内（旧 15 区）をさす場合もあるが，それはたかだか 83.6 平方キロ（c）。これは 23 区（b）の約７分の１の狭い区域である。ちなみに朱引内は寺社奉行支配地で，墨引内より多少広い。（秋永 2004, 658p より）

このように，江戸という時代背景を考慮すると，上記にある「町奉行の支配地」以外に文化の中心地はなかったと考えられ，『東京弁辞典』によれば「東京弁」はこの「東京（c）生育者」の言葉であると定義されています。また，このようなことも書かれています。

> 住民の意識としては，東京（a）（b）（c）のどこで生育したかによって，“東京”を意識する地域にずれがある。まして首都圏を含む他地域生育者は，もっと漠然とした感覚でとらえている。（秋永 2004, 658p より）

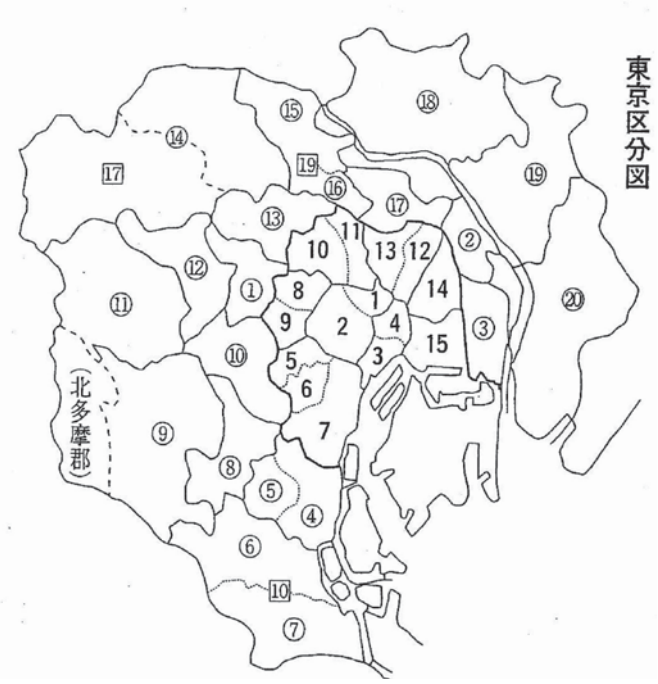

図1　東京区分図（秋永2004，659p）

秋永さんのつくられた東京区分図（**図 1**）と東京地区対照表（**表 1**）によれば，ゴチックの 1～15 までがこの旧市内になるわけです。ここが純然たる昔の「町奉行の支配地」になります。そして、その周囲にある⑪番の杉並区，⑨番の世田谷区や北多摩郡などが加わり，これが現在の 23 区ということになります。

		( )旧15区 [ ]新20区 【 】新々3区			
			11	⑧[目黒区]	
			12	⑨[世田谷区]	神奈川県北多摩郡編入
1	千代田区	1（神田区） 2（麹町区）	13	⑩[渋谷区]	
2	中央区	3（京橋区） 4（日本橋区）	14	⑪[杉並区]	
3	港区	5（赤坂区） 6（麻布区）	15	⑫[中野区]	
		7（芝区）	16	⑬[豊島区]	
4	新宿区	8（牛込区） 9（四谷区）	17	【練馬区】	板橋区より分離
		①[淀橋区]	18	⑭[板橋区]	
5	文京区	10（小石川区） 11（本郷区）	19	【北区】	⑮[王子区] ⑯[滝野川区]
6	台東区	12（浅草区） 13（下谷区）	20	⑰[荒川区]	
7	墨田区	14（本所区） ②[向島区]	21	⑱[足立区]	
8	江東区	15（深川区） ③[城東区]	22	⑲[葛飾区]	
9	[品川区]	④[品川区] ⑤[荏原区]	23	⑳[江戸川区]	
10	【大田区】	⑥[大森区] ⑦[蒲田区]			

表1　東京地区対照表（秋永2004，659p）

８．武士言葉が「東京語」へ与える影響

さて，江戸では武士の人口がたいへん多かったということを認めておく必要があります。その人口構成については，外国人Ｊ・Ｃ・ヘボン（ジェームズ・カーチス・ヘボン）の手紙によりますと，次のように記されています。

外国人Ｊ・Ｃ・ヘボンの手紙によると，総人口約 150 万，「そのうち約 50 万人が一般民衆，すなわち商人，職人，労働者などで，20 万人は僧侶，残りの 80 万人は大君御一家，大名，役人，武士，大名の家臣です」（高谷道男訳『ヘボン書簡集』）という状況で、武家の人口がもっとも多かった。（飛田 1993, 33p）

いままでともすると，江戸の人口の統計に信頼のおけるものがなく不明でした。幕府は，とにかく人口が多いほうがいいとプラスアルファをつけているので信頼がおけません。しかし，外国人の資料の数字は，キリスト教の宣教師が本部へ送るものですから，正しい数字だとみてよいと思います。

そしてまた，武士の中の旗本と御家人の人数もある程度はわかりますが，統計はまだ分かりません。ここには引用しませんでしたが，明治になると，旗本が何軒，士族が何軒といった初年の戸数は分かります。戸数だけでいうと，武士のほうが商人より多いか同数であり，武士の数は決して少なくありません。つまり，「武士言葉」の存在を証明できるだろうと考えます。

それを証明するために，アーネスト・サトウとかチャンブレンやサムエル・ロビンス・ブラウンの「Colloquial Japanese」といった「英学資料」，「洋学資料」と呼ばれている会話書の類を調べました。そういうものに代名詞の項目があり，そこに「これは大名が使う」，「これは将軍が使う」，「これは旗本が使う」と書いてあります。それでは，実際に武士言葉にはどのくらい特色があったのでしょうか。

この**表 2**（飛田 1993，36p）には明治 4 年（1871 年）『安愚楽鍋』の「鄙武士」・「士」・「町人」・「商法個」・「職人」の和語と漢語の使用率を示しています。ここでは，ことばの使用率を「武士階級」と「町人」との間で区別することができるのではないでしょうか。異なり語数の漢語を見ると，35％の「士」と 26％の「町人」では大差があるとみてよいと思います。これは，藩校へ通ったか寺子屋へ行ったかの違いでしょう。

	延べ語数		異なり語数	
	和	漢	和	漢
鄙武士	58.0	42.0	54.1	45.9
士	72.1	27.9	64.8	35.2
町　人	77.6	22.4	74.1	26.0
商法個	80.8	19.2	76.0	24.0
職　人	83.8	16.2	83.1	16.9

表2　『安愚楽鍋』の和語と漢語の使用率（%）

表 3･4（飛田 1993，35p）は，『安愚楽鍋』に出てくるすべての人物の使っている代名詞と文末の表現の出現数を示しています。文末の表現は，「ＡはＢである」の「である」にあたるところで「指定表現」と言っています。

まず，**表 3** をみると，「僕」を使っているのは「士」のグループだけであることから，「僕」ということばは「士」から一般化したことはまず間違いないとだろうと考えられます。そして，右下へと続くと，「職人」は「おら」と「こちとら」を使っていることが分かります。「芝居者」，

「落語家」，「幇間」は「わちき」と「わっち」を使っているというふうに，はっきりと代名詞が違います。

また，**表 4** をみると，「ダ」は「士」を除いて「女（B）」の一番下まで使用されています。それに対して「ジャ」は，「士」を含む「男（A）」の分類に属する，文字・漢字を読むことができたと考えられる人々が使っています。

そして，今度は「デゴザル」から「デゲス」までは現れ方が斜めに傾斜していることがわかります。「デゴザル」は「武士」だけが使っており，「町人」は「デゴザリマス」と「デゴザイマス」だけだとわかります。また，「落語家」は「デゴゼエヤス」と「デゴゼエス」と「デゲス」を使っている。しかし，「職人」は「ダ」しか使っていません。

語種		漢語			混	和語								計
話し手	代名詞	僕	愚老	拙	わが輩	わたくし	われわれ	おれ	おいら	おら	こちとら	わちき	わっち	
男(A)	士	3												3
	鄙武士	1												1
	生文人	2												2
	新聞好きの男	5			2									7
	西洋好きの男						1							1
	藪医者		5											5
男(B)	町人					2								2
	異人					1								1
男(C)	商法個								5					5
	なまけものの男								5					5
	あくぬけした男							1	1					2
	通がっている男							1						1
男(D)	職人									1	1			2
	車夫							1		1				2
	牛							1						1
	馬										1			1
男(E)	芝居者												6	6
	落語家								1			1	3	5
	野幇間			1								5		6
女(F)	まじりみせの娼妓											6		6
	新造（小の町）											1		1
	歌妓											6		6
	ころ											11	1	12
	ひき												2	2
計		11	5	1	2	3	1	4	12	2	2	30	12	85

表3　『安愚楽鍋』の一人称代名詞

使用者	指定語	1				2								3				計
		デアル	デアリマス	ダ	ジャ	デゴザル	デゴザリマス	デゴザイマス	デゴゼエマス	デゴゼエヤス	デゴゼエス	デゴウス	デゴス	デゲス	デス	ザンス	ザマス	ダマス	
男(A)	鄙武士	2			2	3													7
	士				15														15
	生文人			7	3														10
	藪医者			6	6								1						13
	新聞好きの男			16	1														17
男(B)	町人						4	5											9
	商法個			23															23
	唐物屋の番頭			1															1
	車夫			4			1			1									6
	芝居者		1	9					3	8									21
	生文人のファン						1												1
	異人		1																1
男(C)	落語家			9						2	7			5					23
	幇間			3							4			4					11
	西洋好きの男			8							1	2	3	2					16
男(D)	職人			19															19
	文盲の男			15															15
	なまけものの男			8															8
	あくぬけした男			27															27
	牛			2															2
	馬			7															7
女(A)	娼妓	1		9												7	4		21
	新造														1		1		2
	番新																	1	1
女(B)	歌妓			16															16
	芸者			1				1							1				3
	茶屋女			21											2				23
	それしゃあがり			17											1				18
計		3	2	228	27	3	6	6	3	11	12	2	4	11	5	7	5	1	336

表4　『安愚楽鍋』の指定表現

9．標準語（国定教科書）が「東京語」へ与える影響

そこで今度は「標準語」と「共通語」という問題に入ります。標準語が存在したのは，明治 37 年から太平洋戦争終了後の昭和 24 年までで，国定教科書の言葉がそれであります。

文章ハ口語ヲ多クシ，用語ハ主トシテ東京ノ中流社会ニ行ハルルモノヲ取リ，カクテ国語の標準ヲ知ラシメ，其統一ヲ図ルヲ務ムルト共ニ，出来得ル丈児童ノ日常使用スル言語ノ中ヨリ用語ヲ取リテ，談話及綴リ方ノ応用ニ適セシメタリ。（明治 37 年国定教科書『尋常小学読本』の「編纂趣意書」，飛田 1993, 10p より）

ここで大事なことは，「談話及綴リ方ノ応用ニ適セシメタリ」という部分です。要するに，話しことばだけ書きことばだけではなくて，「話しことばも書きことばもこの教科書の文章を手本にして話しなさい，書きなさい」と言っているということなのです。ここのところがいままでいちばん欠けているところで，書きことばだけだと思っている人，話しことばだけだと思っている人が研究者の中にもたくさんおられます。

さて，小学校の就学率の一覧表を紹介します。

表 5（飛田 1993，47p）の平均を見ると，明治６年では小学校へ入ったのが 28%です。男が 39%，女は 15%を示し，だいぶ男女差があります。それに対して，国定教科書が使われるようになった明治 37 年を見てみると，平均が 94%で男が 97%，女性も 91%です。国定教科書がいかに利用され，その影響力があったかということだけはこれだけでも歴然と証明できるのではないでしょうか。

そして，明治以降の小学校の教科書には，（ａ）指定教科書，（ｂ）準検定教科書，（ｃ）第一次検定教科書，（ｄ）国定教科書，そして（ｅ）「共通語」と私が言っている第二次検定教科書とがあり，影響を与えているというわけであります。

年度	平均	男	女
明治 6	28.13	39.90	15.14
7	32.30	46.17	17.22
8	35.19	50.49	18.58
9	38.32	54.16	21.03
10	39.88	55.97	22.48
11	41.26	57.59	23.51
12	41.16	58.21	22.59
13	41.06	58.72	21.91
14	42.98	59.95	24.67
15	48.51	64.65	30.98
16	51.03	67.16	33.64
17	50.76	66.95	33.29
18	49.62	65.80	32.07
19	46.33	61.99	29.01
20	45.00	60.31	28.26
21	47.31	63.00	30.21
22	48.18	64.28	30.45
23	48.93	65.14	31.13
24	50.31	66.72	32.23
25	55.14	71.66	36.46
26	58.73	74.76	40.59
27	61.72	77.14	44.07
28	61.24	76.65	43.87
29	64.22	79.00	47.53
30	66.65	80.67	50.86
31	68.91	82.42	53.73
32	72.75	85.06	59.04
33	81.48	90.55	71.73
34	88.05	93.78	81.80
35	91.57	95.80	87.00
36	93.23	96.59	89.58
37	94.43	97.16	91.46
38	95.62	97.72	93.34
39	96.51	98.16	94.84
40	97.38	98.53	96.14
41	97.83	98.73	96.86
42	98.10	98.86	97.26
43	98.14	98.83	97.38
44	98.20	98.81	97.54
45	98.23	98.80	97.62

表5　小学校の就学率（%）

１０．世代差が見られた「東京人意識」

次は，東京人の意識調査という，これは先ほど竹田さんが説明してくださったものについて説明します。

表 6（飛田 1997, 114p）の調査票では「親」・「子」・「孫」となっておりますが，孫は短大生で十八歳から二十歳ということになると，その親は二十歳で結婚したとすればだいたい四十歳ぐらいを想定しました。

表 7（飛田 1997，118p）には「あなたは東京人だと思っていますか」というのを，高尾から新宿まで

調べた結果を示しました。これは男女一緒に集計したもので，回答の「半分くらい東京人だと思う」を示す△印が回答の半分ぐらいといった結果になりました。

表 8（飛田 1997，119p）は男性のみの結果を示してあります。男性だけだと，武蔵境のほうから日野までの親世代は「完全に東京人だと思う」を示す○印です。そして子どもと孫世代は豊田まで○印がつきました。

そして，**表 9**（飛田 1997，120p）は女性だけの結果です。武蔵境の親世代のほうから見ていくと，立川までは東京人だと思っていることが分かります。そして孫のところを見ると，八王子までが東京人だと思っているのです。こういうわけで，年齢や世代が下になればなるほど東京人意識の範囲が広がっているということがわかったのでございます。

東京語調査票

被調査者名 _____ （ 歳）（親・子・孫）

調査者名 _____

1．被調査者
a 名前 _____ 生年月日____年___月___日___歳
b 性別 男 ・ 女
c 職業 _____
d 学歴 小 ・ 中 ・ 高 ・ 大 ・ その他（ ）

2．現住所

_____

結婚によって現在の土地に移住した場合
結婚前 _____
結婚後 _____

3．調査環境

個人別 ・ 家族揃って

4．調査日時

平成___年___月___日 午前/午後___時___分～___時___分

5．調査者
a 名前_____ 生年月日___年___月___日
b 性別 男 ・ 女
c 学歴 白帝大学 国文学科___年

表6 東京語調査票（見本）

東京語調査集計票 (A) 世代・地域別

項目番号	調査語	性別
1	東京人意識	男・女

〔質問文〕 あなたは東京人だと思っていますか

〔記入日〕 1994・11・26

駅名	高尾	西八王子	八王子	豊田	日野	立川	国立	西国分寺	国分寺	武蔵小金井	東小金井	武蔵境
親	△2	△	△	×	○ △	○	○ △3	○	×	○2	○	○ △
子	△	△ ×	△	○ △	△2	○ ×	○4 △ ×	△		○2	○	△2
孫	△	△	○	○	○	○	○3 △	○		○	○	○

駅名	三鷹	吉祥寺	西荻窪	荻窪	阿佐ヶ谷	高円寺	中野	東中野	大久保	新宿	……
親	○2	○2 △	○2	○2	△ ×	△	×		○ △	○2	……
子	○2	○2		○ ×	○ △	○	×		○	○2	……
孫	○	○2 △		○	×	○	○		○	○	……

○〔はい完全に〕 △〔半分くらい〕 ×〔いいえ〕 他〔 〕

表7 東京語調査集計票

東京語調査集計票 (A) 世代・地域別

項目番号	調査語	性別
1	東京人意識	(男)・女

〔質問文〕 あなたは東京人だと思っていますか

〔記入日〕 1994・11・26

駅名	高尾	西八王子	八王子	豊田	日野	立川	国立	西国分寺	国分寺	武蔵小金井	東小金井	武蔵境
親	△				○	○	○△	○	×	○	○	○
子		△	△	○	△	○	○×			○		△
孫	△			○			○	○				

駅名	三鷹	吉祥寺	西荻窪	荻窪	阿佐ヶ谷	高円寺	中野	東中野	大久保	新宿	……
親	○	○△	○	○	△		×		○	○	……
子	○			×	○		×			○	……
孫		○△		○						○	……

○〔はい完全に〕 △〔半分くらい〕 ×〔いいえ〕 他〔 〕

表8 東京語調査集計票

東京語調査集計票 (A) 世代・地域別

項目番号	調査語	性別
1	東京人意識	男・(女)

〔質問文〕 あなたは東京人だと思っていますか

〔記入日〕 1994・11・26

駅名	高尾	西八王子	八王子	豊田	日野	立川	国立	西国分寺	国分寺	武蔵小金井	東小金井	武蔵境
親	△	△	△	×	△	○	○△2			○		△
子	△	×		△	△	×	○3△	△		○	○	△
孫		△	○		○	○	○2△			○	○	○

駅名	三鷹	吉祥寺	西荻窪	荻窪	阿佐ヶ谷	高円寺	中野	東中野	大久保	新宿	……
親	○	○	○	○	×	△			△	○	……
子	○	○2		○	△	○			○	○	……
孫	○	○			×	○	○		○	○△	……

○〔はい完全に〕 △〔半分くらい〕 ×〔いいえ〕 他〔 〕

表9 東京語調査集計票

１１．「東京語」研究の流れ

その次に「東京語」をめぐる研究史について簡単にふれておきたいと思います。『日本語学研究事典』には「東京語」という項目がありまして，これは私が書いた事項でございます。それを資料として説明していきます。まず，「東京語」の定義が（1）～（4）に記されています。中村通夫さんの書いた山の手言葉について，あるいは「東京語というのは下町ことばだけだ」・「山の手ことばだけだ」といったような，（1）～（4）の４種類を紹介しておきます。

中村通夫は『東京語の性格』でそれらの諸説を分類して（1）東京でつかわれることばが東京語であるとするもの。（2）いわゆる下町ことばをさして東京語とするもの。（3）いわゆる山の手ことばをさして東京語とするもの。（4）現代口語文をもって東京語の文字化されたものと考え、それから逆に口語文を

音声化したもの、に整理した。（『日本語学研究事典』，543p，「東京語」より）

次には，東京の範囲，東京人の範囲といったようなことを先ほど述べたことが紹介してあります。

一般には「東京における東京人の使う言葉」を東京語と定義し、「標準語あるいは全国共通語の基礎となっている言語体系」と考えている。しかしながら、「東京」の範囲、「東京人」の範囲がまた、さまざまであって明確ではない。飛田良文は、東京とは首都のあるところであり行政・文化の中心地であるから、その範囲は農村地帯を除いた都市の性格をもつ市街地を考えればよいとする。そうすると、都市「東京」は明治から今日まで、次々とその範囲を拡大してきた。（中略）また、「東京人」の範囲も、親子孫三代東京生まれの人に限るという説もあるが、本人が東京生まれであれば東京人とする考え方が一般的である。しかし、小学校入学前から東京に定住し、東京人と意識するに至った人は、東京生まれでなくとも、東京人と定義してさしつかえないものはなかろうか。（『日本語学研究事典』，543p，「東京語」より）

そして，つづけて山の手ことばと下町ことばについて書いてございます。

東京語を都市生活を反映した言語体系と考えると、明治大正時代の文化の中心は江戸文化の伝統を伝える下町にあった。（中略）しかし関東大震災を契機として、浅草に鉄道の通らなかったことも影響して、下町文化は急速に衰え、山の手文化がこれに代わった。（中略）教科書の口語文のもとになったのは、言うまでもなく山の手ことばであった。（『日本語学研究事典』，543p，「東京語」より）

この『日本語学研究事典』の「東京語」の項目には，以上の説明に続いて【研究史】・【課題】がまとめられ，そして「参考文献」が続いております。「参考文献」は，「研究書」と「論文」とに分かれています。そこに書かれた流れを簡単に紹介いたします。

まず，最初の今村明恒さん（今村明恒編 1915『東京弁』日本のローマ字社）から始まって，小峰大羽さん，斎藤秀一さんあたりまでが方言集であります。その次が中村通夫さんの『東京語の性格』（1948，川田書房），松村明さんの『江戸語東京語の研究』（1957，東京堂）というふうに，今度は東京語の歴史に関する研究書が続きます。そして私も『東京語成立史の研究』（1993，東京堂出版）を書きました。いちばん最後が秋永一枝さんの『東京弁辞典』（2004，東京堂出版）です。 あとは，昭和 63 年に読売新聞の社会部で『東京ことば』（1988，読売新聞社）という書籍を出版しております。

その後，「論文」では，最初のあたりに吉田澄夫さん，その次に中村通夫さん，次に金田一春彦さん，松村明さん，金田弘さん，川上秦さん，田中章夫さん，私，進藤咲子さん，大石初太郎さん，土屋信一さん，加藤正信さんと続きます（『日本語学研究事典』，544~545p，「東京語」より）。

このうち，加藤正信さんの「変化する郊外のことば」（1970，『言語生活』225）というのが，

これが「東京語」から「首都圏語」へということをまとめた最初のものかと私は思っております。

それからその次に，身分・職業・性別との関係を考察した私の「明治初期東京語の否定表現体系」（1974，『ことばの研究』5）がありますが，これは，ことばの形式「ない」，「なんだ」，「ず」といった否定表現を『安愚楽鍋』に登場する全ての人物について調べたものです。先ほど紹介した一人称の調査（**表 2**）と同じような結果が出ました。

次には，清水康行さん，三井はるみさん，小松寿雄さんと出てきます。そして，私が「山の手のことばの形成」（1988，『国語と国文学』65-11）に書いたものは，旗本御家人の武士ことばが現代標準語のもとだと書いたものでございまして，これはぜひ読んでいただきたいと思います。

続いて，『日本語学研究事典』のうち「標準語」の項目についてみていきます。ここには，「標準語」から「共通語」ということばが分離するのは国立国語研究所の岩淵悦太郎の提案によるものだということを述べてあります。

> **昭和 23 年には国立国語研究所が設立された。ここから標準語と共通語とを区別する考えが誕生する。（中略）共通語とは『全国どこでも通ずるような言葉』、標準語とは『なんらかの方法で国として制定された規範的な言葉』という定義であった。この区別をしたのは当時の岩淵悦太郎研究部長であり、その事情は柴田武著『方言の見方・考え方』（『国語シリーズ 61』昭和 43 年，教育図書）に詳しく記されている。（『日本語学研究事典』，540p，「標準語」より）**

そして参考までに，加藤正信さんの書いた「共通語」の定義もあるので，ご紹介いたします。

> **国内に方言差があっても、意思を通じあうことのできる言語。これは標準語のように必ずしも規範性を持たず、実用的・現実的なものである。共通語の母体は、日本語の場合、首都の東京のことばである。（『日本語学研究事典』，541p，「共通語」より）**

１２．おわりに

今日，「東京語」は土着の人と移住してきた人と外国人との立場から考える必要があり，さらに人口の構成や人口移動を調べる必要性，明治維新，関東大震災，太平洋戦争がその人口移動の最たるものであることを述べてまいりました。

私としましては，太平洋戦争後から今日までの間ではどこで区切りをつけるべきか，これが東京オリンピックなのか，テレビの普及なのか，それとも男女雇用法の問題なのか，そのあたりのご意見が伺えるとたいへんありがたいと思っております。

そして，「親」・「子」・「孫」という世代差によって調査をすると，その家族での言語ボスが見えてきます。そういうことを調べるのが，これからの社会言語学のひとつの観点ではないかと思います。

そして研究史を大雑把に見ると，まず東京語史研究と方言集の作成，方言地図に関しては国語調査委員会が明治時代に全国調査をやったんですが，東京市だけありません。そのために，東京

市の部分の調査は，私の知っているところでは大島一郎さんの『東京都言語地図』なのではないでしょうか。その前にあるかどうかを私は知らないので教えてほしいと思っています。

そしてそのあと，中村通夫さんによる「江戸語」から「東京語」への研究が始まり，これからは「東京語」から「首都圏語」へという研究をする必要があると思います。それでこの三井さんのグループの研究のテーマにつながっていると思います。そして社会言語学的な世代差とか家族ごとの調査というのが，これから新しい分野であろうと考えているわけでございます。

以上をもちまして私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

引用文献

秋永一枝編（2004）『東京弁辞典』東京堂出版.
飛田良文（1993）『東京語成立史の研究』東京堂出版.
飛田良文編著（1997）『日本語文章表現法』白帝社.
飛田良文ほか編（2007）『日本語学研究事典』明治書院.

質疑応答

司会（三井はるみ）　どうもありがとうございました。それではご質問などございましたら，お願いいたします。

田中章夫　田中章夫でございます。私は赤坂生まれで麻布育ちなんですが，小学校のときに豊島園に遠足に行きまして，水筒の水がなくなって近所の家に飛び込んで，「水を入れさせてください」と言ったら，井戸を指して「そこにあっぺ」と言うんですね。だから先ほど飛田さんがおっしゃったように，世代，年代によって，東京語圏というものが違う。たぶんその人たちは，われわれは，「あれは東京もんで東京ことばだ，自分たちと違う」ということだったんだと思うんですね。いまは，葛飾柴又が下町ことばの代表みたいになっていますが。

それはそれとして，先ほど飛田さんが挙げた例のなかに「アタイ」というのが出てきます。私も山の手の小学校だったので「僕」「君」なんですが，下町から転校してきた男の子が「アタシ」「アンタ」と言うんですね。その話を学生に大学でしましたら，大野晋先生が，「ぼくが子どものころ『アタイ』だった」と。さらに，「開成中学へ行って，みんな『僕」』『君』と言うのでびっくりしたんだ」という話をしていらっしゃいました。だからそういう，山の手と下町と，それから深川というのは話しことばでもずいぶん違ったんじゃないかと。私も母が下町だったんで，うちでは「ダイドコ」と言っていて，友だちはみんな「お勝手」と言うんですね。それからうちでは「オツケ」って言うんですが，友だちがみんな「オミオツケ」なんですね。それで下町に親戚というか，米屋さんがあったんですが，その米屋さんがうちへよく配達に来てくれて，その米屋さんが，私たちにも「アンチャン」と言うんですね。まず東京じゃ使わない「アンチャン」と言われて，「何だろう」と，そういうことが経験ありまして。東京方言の中でも，山の手，下町と言いますけれども，深川というのはかなり違っ

たんじゃないかなと思うんですね。それはそのあたりで，山の手，下町という二分じゃなくて，まだいろいろ，きょうのあれでは亀戸もありましたけれども，深川というのはやっぱり，入れておかなきゃいけないんじゃないかなと思いました。どうも。

司会　ありがとうございました。いまお話があって，先ほど調査項目に「台所」とか「みそ汁」という項目が入ってきましたけれども，その設計された理由もわかったような気がいたしました。

上野善道　せっかくの機会ですので，飛田先生にお伺いしたいと思います。まず先生のお考えを正しく理解しているかどうかを確認してからですが，先生が「標準語」とおっしゃるときには，唯一の国定教科書という形で規範が１個しかなく，それを「標準語」とおっしゃっていて，そして戦後になって，検定の教科書になった段階で，一本ではなくなったということから，いわば規範が緩くなった，それを「共通語」というふうにとらえていらっしゃるという理解でよろしいですか。

飛田　はい，それでけっこうです。

上野　はい。それに関連して２つ質問があります。国定教科書という形で，確かに１つに定まった，それはそうだろうと思うんですが，それは形として固定化されているものであって，実際に話し手が使うときにどうなっているかというのは，またちょっと別の問題かなと思うんです。

つまり教科書で１つであるからといって，それを使っている人みんなが同じように話すわけではないだろうし，おそらく書きことばでもすぐに全部統一化されたわけではないだろうと思うんです。そこのなんていいますか，規範として定まっていることと実態との関係に関して，先生はどうお考えなのかということが１つ。

それからもう１つは，先ほどの後半のところで国語研究所のお話が出まして，岩淵さんだとか柴田さんなどから，いわば「共通語」という概念が普及してきたんですけど，その「共通語」というのと，先生が定義された「共通語」というのは，どうも違うのではないかと私は思うんですね。同じ「共通語」ということばを使っていても観点がずいぶん違っているんではないかなと思うんです。以上の２点に関して教えていただければと思います。

飛田　まず，国定教科書のことばと現実のことばはどうしてもずれますね。そしてその研究が，まだだれもやっていないというのが私の感想なんですが。だから基準になるものの一覧表は『国定読本用語総覧』でできたということになります。今度はそれがどのように影響を与えたかということを調査する研究が，これからの未開拓の分野だというふうに考えておりますが。

ですからこれから小説と比べてほしいなあと，新聞と比較してほしいなあと，こういうふうに思っているんですが，比較すべきものの語彙調査がないんです。あれば私がすぐでも引くんですけれども，あいにくとそれとうまく合うものがないというふうに私は考えております。

それから共通語のほうの国語研究所で言っている「共通語」と，私の定義の「共通語」とが同じか違うかは，ちょっと私もよくわかりません，正直のところ。

というのは，岩淵さんのいった研究所のものは，鶴岡とかの『言語生活の実態』で言われたところから始まっているわけですね。だから仮説として規範的なものと現実に使われているものとを分けて，その具体的に使われているものを「共通語」の調査とされたんではないのかなと思っているけれど，どうでしょうか。

鑓水兼貴　あの，いまのはたぶん白河調査だと思うんですね。

飛田　あ，白河の調査。

田中　それは，「方言でどう言いますか」というような聞き方，あるいは「方言では，こう」というようなことを言って，非常にまだ当時，昭和20年代ですね，抵抗があったと。「方言」と言われるともう答えてもらえないというようことで，何かほかに言い方がないかということで，柴田さんあたりが「共通語」というのをつくって，「方言」というのを調査に使うなということを聞いてました。私が，東京に帰ったころですね。

あのころまた，「共通語」っていうのが，小学校の教科書，中学生の教科書に「共通語」が出てきたんですが，「英語は世界の共通語」などというふうな言い方があるので混乱するというような，教育界から「標準語じゃいけないのか」と出てきています。標準語は，やっぱり昔から「方言撲滅」というようなことで使われてたんで，やっぱり「共通語」のほうが抵抗がないということです。

結局，「共通語」ってのは，少なくとも昭和30年代までは，「方言」と言うと抵抗があるからということがベースになっていたような気がするんですが。私が関係者に聞いた範囲ではそういうことです。

飛田　私の考える「共通語」は，「地域共通語」と「全国共通語」がありますね。ですから，私の言っているのは「全国共通語」のつもりで先ほどは申しておりましたが，それで答えになっているでしょうか。

上野　ありがとうございます。ちょっとこのあと，飛田先生というよりも，田中先生のあとを受けての私の勝手な感想です。「共通語」ということばがはやった背景，１つは，おっしゃったように「方言」との関係なんですけど，１つは「標準語」に対する抵抗をなくすという，あえて言いますと非常に戦略的なもので，それをやったのが柴田先生だと私は見てるんです。実は，「共通語」だという形で「標準語」を普及させたのが柴田先生ではないか。

もちろん，「標準語」とは何であるかとか，具体的な語形が２つあったときに１本にしぼれとか，そういう話はちょっと別問題です。現実の言語として，ゆれがない言語なんてあり得ませんから。英語の標準語だってどこだってゆれがある，変化がある。したがって，私は日本語はもう標準語が確立していると見ています。つまり試験問題も全国一律に出して採点ができる，日本語教育もできるというのは，まさにそれを「共通語」という名前でもって，むだな抵抗をなくして非常に滑らかに標準語の普及を成功させた結果であって，それが柴田先生の非常に大きな功績ではなかったかと，私は個人的に思っております。ちょっと余計なことまで申しあげました。

田中　私が言ったのは，「共通語」ということばを使わざるを得なかったということ，いちばん最初ですね，八丈島，白河といったときに，「方言」ということばを使うと調査しにくいと

いうことがスタートだったと聞きましたけどね。ただ，それからだんだんに「共通語」にいろいろな意味がですね，全国でも……。

上野　いろいろ使われ方によって変わってきたと。

田中　最初使ったのは，「方言」と言うのをやめようと，使わないで調査しようというところからだったと柴田さんたちから聞いております。

上野　はい。

飛田　その「共通語」の問題は，standard language と common language の訳語の区別ということから私は始まったんじゃないのかなあと思っているんですが，これは個人の感想ですからどうかわかりませんが。

　それともう１つは，国語教育の世界が，やはり相当大きく影響していると思っておりまして，私はそっちのほうを調べていないのでわかりませんけれども，国語教育のほうで，文部省で「共通語」というのを非常に広く使ったんじゃないでしょうか。それが影響したんじゃないかと。もちろん，そこに柴田先生のご意見が当然反映しているとは思いますけれども。私の感想です。

司会　戦後の言語政策史に触れるようなお話になりまして，この場を設けてよかったなというふうに思っております。それでは，きょうの研究発表会はこれで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。